

NO. 43
October '07

Newsletters

神戸女学院大学
女性学
インスティテュート

2007年度 特別講演会

「移民の女性化にみられる ジェンダー・ダイナミクス」

北 條 ゆかり

植民地として長らく移民を受け入れてきたラテンアメリカは、今ではすっかり労働力を排出する側へと転じた。その筆頭がメキシコであり、行く先は北隣の巨人、米国である。そもそも両国間には、19世紀半ばに米国がメキシコに対して仕掛けた戦争によってメキシコが当時の国土の半分強を割譲したという歴史がある。現在の米国南西部の地名は、英語訛りで発音されているがじつはスペイン語なのである。それらの地域で英語よりスペイン語が優勢であるのもそうした経緯あつてのことで、今やメキシコ人だけでも1,100万人（メキシコ総人口の1割）が米国に在住している。もともとかの失地に居住して米国籍となった人びとの子孫—彼らは出自を強調し「イスパノ」と自称している—や移民第二世代以降を含めると、メキシコ系住民は2,800万人を超える。しかも、米国の都合により移民政策が揺れ動き、移住時期の違いによって同一家族内でも合法と非合法の立場の混在がみられる。「非合法」移民はさまざまな差別・苦難に直面しており、メキシコ政府としてもそれを放置してはおけない。在米移民からのメキシコ向け送金額が230億（2006年）ドルに達し、石油に次ぐ収入源となっているだけにおさらである。他方、米国は「非合法」移民の取締りを強化し、国境を要塞化させた。その結果、一旦越境すれば帰国を躊躇い、滞在期間は長期化している。グローバリゼーション下の両国関係にとって、移民は重要な懸案事項なのである。

そうしたなか、農場での季節労働者や建設業界での日雇い労働者として男性が移民し、農村部には老人、女性、子どもが残されるというこれまでの事態に変化が見られる。従来の還流型男性移民とは異なる「もうひとつの国際労働移動」として、家事、保育、介護といった再生産労働に従事する女性移民が近年増加してきたのである。メキシコから米国へ向かう女性移民は過去10年間で倍増し、統計にのぼる数だけでも480万人に達している。彼女たちは家族との合流目的に限らず、単身でも、そして「非合法」であるゆえの高額な

密入国費用と生命の危険を賭してでも、雇用機会を求めて越境することを厭わない。移民前より高い割合（80%）で女性は経済活動に参入し、3人に1人が世帯主なのである。この状況は、市場経済のグローバル化とサービス経済化（ポスト工業化）に特徴づけられる、今日の世界規模での経済的社会的変動に根ざしたものである。米国との国境地帯に展開するマキラドーラ（保税輸出加工区）へと農村部から吸引された若い女性たちが、マキラドーラのアジア諸国への移転や閉鎖に伴い失職した時、出身村では生存維持経済が崩壊していて越境に踏み切れないという事態も後を絶たない。農業振興政策の失敗と北米自由貿易協定により、主食のトウモロコシ生産が大打撃を受けたのである。米国側にも女性移民の労働力を必要とする誘因がある。すでに1960年代以降、女性解放運動や公民権運動によって米国では女性が底辺労働に就かなくなり、移民女性がその間隙を埋めた。その後、平均賃金が低下するなかで生活水準を維持するためにも女性の社会進出が促されたことで、家事労働、再生産労働に対する需要が増大したが、こうした産業・社会構造の変化が招いた不安定就業層の必要性を「非合法」女性移民が充足したのである。しかも、こうした職種と身分では労働組合の組織化も社会保障整備の要求もできないということが雇用主にとっては好都合だった。

女性移民が直面している問題は、越境過程でレイブや組織的犯罪に巻き込まれる可能性、受入れ社会からのジェンダー・階級・エスニシティをめぐる三重の差別と搾取、移民共同体内部での家父長的ジェンダー関係の再生など多岐にわたっている。経済面での「脱国家化」を推進しつつも人の移動に関して規制を続ける「再国家化」が問題視される所以であり、現代の国際的人権レジームのもとでは居住外国人の実質的な市民権の獲得が強く求められている。国家が国境を越える人の移動に対して権力を行使すればするほど、国民国家の抱える矛盾が明らかとなるのだが、とすれば女性差別の打開を女性の社会進出を支援する福祉政策の拡充等に求めようとしたジェンダー論の大潮は、国民国家内部に視野を限り、グローバリゼーションのこうした側面を捉え返すことに力点を置いてはこなかった。しかし、移民が出身地と移住先を結びつける社会的領域—人、貨幣、商品、情報の循環と交換を可能にする

ネットワークを構築していく過程で、国境の両側にすでに越境的な共同体が形成されつつあり、相互に強い影響を及ぼしているという現実がある。女性移民の抱える厳しい現状と越境的な共同体の存在に焦点をあててみれば、先進経済国に支配的な政治経済レジームの内部ではすでに労働力の再生産過程をめぐるエスニシティの多様化が促進され、国民国家や国民経済という枠組みを超える領域性と空間が形成され始めているが、それはジェンダー差別のもとでの構造化なのだということがわかる。この現象は、ひとり米国や西欧諸国に生起しているものではなく、これからの日本社会においても強まってゆくであろうことを銘記しておきたい。(摂南大学外国語学部教授：歴史社会学)

連続セミナー「移民・女性・グローバル化」を担当して

【第1回：2007年6月15日】……………川村暁雄

●「私たちの服は誰が作っている？」

グローバルな分業とアジアの女性」

今年の女性学インスティテュートの連続セミナーでは、グローバル化がどのように人々の生活に影響を与えるのかを女性に焦点を当てて考えていくことを目的としている。

今回は、第1回目ということで、グローバル化のイメージについて参加者とイメージをまず共有した。やはり、買うものが安くなる、さまざまな文化と触れあう等、肯定的なイメージも強い。そこで、グローバル化が進むことにより、否定的な影響もあるということ、2,000人以上が直ちに命を失ったインド・ボパール事故などこれまで起きてきた事件をもとに確認した。また労働の面でも多くの課題を抱えていることについても触れ、問題が生まれる大きな背景として、私たちの生活がモノや金を通してつながっているにもかかわらず、それらがもたらす問題を解決する仕組みが、国境によって区切られていることをとりあげ、国境の生み出す障害をどのように克服していくかを考えた。

グローバル化の問題は根が深い。モノのやりとりは、意識せずとも生じていくけれど、その問題を解決するためには、問題を一人一人が意識し、行動していく必要があるからである。その事が少しでも伝わっていればと思う。(文学部准教授：国際関係論)

【第2回：2007年6月22日】……………米田真澄

●「人身売買受入大国ニッポンの責任と課題

—微笑みの国の女性たちの経験—

グローバル化の勢いのもと国境を越えた人の移動が急速に進むなかで、国際的な人身売買が増加している。その数は世界で60万人から80万人といわれているが正確な数字は不明である。2000年には国連総会で人身売買禁止議定書(「人身取引議定書」)が採択され、2003年より発効している。

日本では1990年代前半に人身売買の被害者であるタイ人女性が、過酷な状況から逃れるために監視役の人を殺害するという事件が相次いだ。同じような事件は2000年にも起こっている。彼女たちは被害者としてではなく、殺人などの加害者として逮捕され有罪判決を受けて日本で服役した。

日本は2004年6月に米国国務省が発表する「人身売買に関する報告書」により「監視対象国」に位置づけられたこともあって、その後急ピッチで人身売買対策を講じてきた。同年12月には「人身取引対策行動計画」を策定し、翌年には刑法に人身売買罪を新設するなどの法整備を行った。また、被害者の保護施設として婦人相談所をあてるなどの措置を行っているが、被害者の保護・支援については課題が多く残されている。

(文学部准教授：国際法学)

【第3回：2007年6月29日】……………横田恵子

●「滞日アジア女性の困難」

医療・子育て・人間関係をめぐって」

第三回は、「対日アジア女性の困難」と題し、日本に移住してきた外国人移住者、特に非英語話者が直面する問題について、中でも医療や健康に関する問題について、事例を交えながら紹介を行った。具体的に紹介を行う中で、日本で暮らす外国籍の人々に、滞在資格によって医療を受ける権利に違いがあることや、子育てや健康維持のためのさまざまな情報が多言語で示されないため必要な情報にアクセスしにくいこと、などが共有できたように思う。

また、このような状況に置かれている滞日外国人コミュニティに対して、日本人側からも応答があることも紹介することができた。すなわち、支援NPOの存在である。外国人支援NPOは、90年代に入って組織化がすすみ、制度・政策では把握できない問題をとりあげ

< P.4 に続く >

From My Window in Rome

Yolanda Alfaro Tsuda

I was born in the Philippines and raised as a Christian. Although I have lived longer in different countries, this background is very important when making decisions and choices. For example, I chose to live in the mountains of northern Osaka because it is the birthplace of Takayama Ukon, a powerful daimyo who became a Christian in the 15th century. He was exiled to the Philippines together with 300 followers and family members and for this he is recognized as the first Japanese political and religious refugee by Japan's United Nations High Commissioner for Refugees (UNHCR).

I have worked with Christian NGOs in different countries particularly those that deal with women migrants and children. For this reason, I was invited to join a Japan delegation to the Vatican in June 2007 and stayed in a seminary in a working class district in Rome. From my window, I saw about 7 or 8 young women standing every night on the street wearing scanty clothes. Then some cars stopped in front of them then they rode in and took off to somewhere.

Minutes later, the same cars returned and dropped them on the same spot. On Friday and Saturday nights, the number increased to include some young men. I learned that they come from poor European countries, Africa, Latin America and even China and trafficked to rich EU countries as sex workers and as cheap laborers; about 10% are children.

When I worked on trafficking issues for the United Nations, I learned that this problem exists in all countries, rich or poor. Therefore, I should not have been shocked by what I saw from my window in Rome. Yet every time that I come face to face with this problem, I get mad at God and ask him/her why violence and degradation exist especially against women and children. The answer that comes back to me is that such situations were created not by God but by human beings. Thus we have the ability and capacity to solve them.

Let us look for the solutions to all inhumane situations. In doing so, life and living will have a much fuller meaning for each one of us wherever we may be.

(文学部准教授：ジェンダー、移住、グローバリゼーション)

学び舎へのオーナーシップ

金田 知子

私は、今年3月に初めてエチオピアを訪問した際、現地の小学校を見学した。首都アジスアベバからランドクルーザーで道なき道を走ること3時間半。その小学校は草原の中にポツリとたっていた。全校生徒は約200人、教師は4人の僻地の小学校だ。

この学校の建設にあたっては、日本政府が費用の一部を支援したものの、その中心的役割は一貫して地域住民が担ったという。雨季には建設資材を積んだトラックがしばしば立ち往生した。すると住民が駆けつけ、資材を手分けして担いで建設現場まで数キロの道のりを運んだ。校舎の土台をセメントで固め、枝などで建物の枠組みをつくり、それに泥土とペンキを塗り、トタン屋根をのせる。近年開校ラッシュが続く日本の私大系小学校とは比べものにならないほど粗末な建物だが、住民手作りのその校舎は、少なくとも私の眼には光輝いてみえた。

これは誇張ではない。その校舎はたしかに輝いていたのだ。そこには、自分が享受できなかった学校教育の機会を自分の子どもたちに与えてあげたいという人々の熱い想いが込められていた。その校舎は、「この学校はコミュニティのものである」という、地域住民の強いオーナーシップ意識のまさに体现であった。

ところで、神戸女学院はその美しいキャンパスで全国的に知られている。震災で被災した際には、めぐみ会から多額の寄付金が寄せられ、女学院は目覚しい復興を遂げたと聞く。これもまた、かつての学舎に対する同窓生の強いオーナーシップの表われにちがいない。

しかしその一方で、現役の学生をみていると、ちょっと不安になる。「女学院というbrandの共有」という意味でのオーナーシップはいまも彼女たちの間に健在だが、「女学院という夢(vision)と志(mission)の共有」という意味でのオーナーシップはあまり感じられない。かくいう私も、女学院に対するオーナーシップ意識があるのか、あればそれはどういう意味においてかと問われれば、答えに窮する。だからこそ私には、あの土壁でできたエチオピアの小学校の校舎が、どこか痛いほど眩しくみえたのかもしれない。

(文学部准教授：社会福祉学)

て個別に援助するだけではなく、医療や司法制度・政策への提言ということも行っている。これらの存在を知ることで、本講演への参加者の方々が、滞日外国人が置かれている状況とそれに対する支援に関して、いくばくかの理解を得られたのであれば幸いである。

(文学部准教授：社会学)

2007年度前期活動報告

特別講演会

2007年6月15日(金)

「移民の女性化にみられるジェンダー・ダイナミクス」



北條ゆかり氏

会場：神戸女学院講堂

講師：北條ゆかり氏

(摂南大学外国語学部

国際文化環境教室教授)

出席者：約200名

連続セミナー「移民・女性・グローバリゼーション」

会場：神戸女学院大学ジュリア・ダッドレー館104教室

<第1回> 2007年6月15日(金)

「私たちの服は誰が作っている？

グローバルな分業とアジアの女性」

講師：川村 暁雄氏

(神戸女学院大学文学部准教授：国際関係論)

<第2回> 2007年6月22日(金)

「人身売買受入大国ニッポンの責任と課題

—微笑みの国の女性たちの経験—

講師：米田 眞澄氏

(神戸女学院大学文学部准教授：国際法学)

<第3回> 2007年6月29日(金)

「滞日アジア女性の困難：

医療・子育て・人間関係をめぐって」

講師：横田 恵子氏

(神戸女学院大学文学部准教授：社会学)

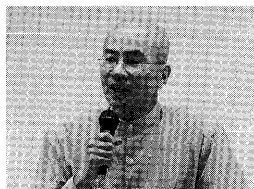
<第4回> 2007年7月6日(金)(講師急病のため中止)

「『排除』か『同化』か?—

フランスとイタリアの事例から」

講師：高橋 友子氏

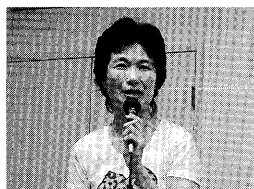
(神戸女学院大学文学部教授：西洋史学)



川村暁雄氏



米田眞澄氏



横田恵子氏



講義風景(第3回)

[受講者：41名、平均出席者：34名(81.7%：当日参加者を含む)、修了証交付者：28名]

2007年度後期講演会のご案内

■学外講演会

会場：西宮市大学交流センター

(ACTA西宮 東館6階) ※阪急西宮北口下車すぐ

(第1回) 2007年10月27日(土) 13:30~15:00

「ナイジェリアの精神障害者と家族

—精神障害とともに生きる女性の語りより—

講師：金田 知子氏

(神戸女学院大学文学部准教授：社会福祉学)

(第2回) 2007年11月21日(水) 13:30~15:00

「飽食の時代に何を食えばいいのか。

女性のための食品学」

講師：高岡 素子氏

(神戸女学院大学人間科学部准教授：食品科学)

2007年度女性学インスティテュート編集委員

金田知子、三浦欽也、高橋友子(委員長)、渡部 充、

山本義和(ABC順)

編集事務：溝口芳子

編集・発行：神戸女学院大学女性学インスティテュート

☎662-8505 西宮市岡田山4-1 TEL/FAX:(0798)51-8545

URL <http://www.kobe-c.ac.jp/gender/>